

さわやかトカラ情報

一隅を照らす十島の教育

十島村教育委員会
〒892-0822 鹿児島市泉町13番13号
TEL 099-227-9771

2月...立志式

十島村教育長 有村 孝一

先月は、十島村「新成人を祝う会」について書いてみました。そこで今回は、立志式について述べてみたいと思います。その昔から、数え年の15歳になると、元服という行事を行い、大人の仲間入りを認められたのでした。それにちなんで、近年、立志式が中学校の行事として広まってきています。具体的な内容は学校毎に異なっていますが、その学校の卒業生で著名人に講演を依頼したりなど、それぞれ工夫を凝らしているようです。参加者は将来の決意や目標などを明らかにすることで、大人になる自覚を深めるというわけです。

立志式は、中学2年生を対象に行われ、これから進む道について、「志を立てる」誓いをし、その前途を励まそうというのが趣旨のようです。それは、自分を見つめ、自分の生き方を考える機会としてとらえることに大きな意義があると考えます。そのために子どもたちは、夢や希望に邁進する決意を示すための言葉などを述べるところもあります。例えば、心身の充実・精神と肉体が一体になることを意味し、物事に向かって集中しているさまを指す、「心身一如」【しんしんいちにょ】。我は進む、我が夢のためにという意味で、「我進我夢」【がしんがむ】など、中学生には少々背伸びした感がありますが、人間の理想と究極の境地を表す言葉になっているようです。

一方で、小学校では、4年生による2分の1成人式というのが行われています。これまでの10年間を振り返り、これからの10年をどのように過ごしていくのか、保護者の前で、将来の夢や決意を述べるわけです。いずれの場合も、大人への自覚を早く持たせ、自分の将来に向かって希望を持って進ませようとするものであります。そして、来るべき成人を向かえた時には、大人として堂々と意見を言えるようになってほしいと思います。

一年中で最も寒い時です。まもなく梅の花も咲きます。



本村で学ぶ子どもたちに大いなる声援を送りたいと思います。西郷隆盛は「雪に耐えて梅花麗(うるわ)しく、霜を経て楓葉(ふうよう)丹(あかし)」と詠んでいます。冬の厳しい雪や寒さに耐えた梅の花が、春になって一層美しく咲く様子を表しています。人も試練を乗り越えてこそ大成するという意味です。

★7島に年2回のALT訪問★

十島村では、各小・中学校に年2回、ALT(外国語指導助手)を派遣しています。県教育委員会や県立高校に在籍する英語を母国語とする7名の外国人が学校の求めに応じて、「フェリーとしま」でそれぞれの学校を訪問



します。波の関係で、欠航したり抜港(寄港を取りやめること)したりで予定の日は変更に変更を重ねます。やっとフェリーが出港したときは、深い安堵感で胸一杯になります。一番近い口之島でも6時間、一番遠い宝島までは13時間かかります。彼らは、長時間波に揺られながら、南海の小さな島まで来てくれます。そして、船で一泊、民宿で一泊して帰って行きます。とてもありがたく思います。子どもたちは、ALTとの授業を、とても楽しみにしています。平成23年度からは小学校5,6年で「外国語活動」が必修となり、中学校だけでなく小学校でも授業がなされています。この写真は悪石島小学校でのALTとの授業風景です。手前が日本人の先生、正面がALTのMatthew(マシュー)先生です。少人数なので、ALTの先生とたくさんの英会話を楽しむことができます。今年、多くの変更がありながら、14回の訪問予定中、12回が終わりました。

シリーズ——十島の学校にやってきて
中之島小学校1年 小原澤そら
「大すきな中のしま」

わたしは、小学校に入るときに中のしまにきました。はじめてみななどについたとき、たくさんの人がむかえてくれてびっくりしました。最初はドキドキしましたが、だんだんともだちができてあそべるようになりました。小学校に入学してせんがきがむずかしかったけれど、れんしゅうをしたらかんたんになりました。いまではかん字がかけるようになりました。とびばこも4だんとべるようになりました。学校はとてもたのしいです。中のしまはやさしい人がたくさんいるのでいいところだとも思います。わたしは中のしまが大すきです。なつになったら、またうみでいっぱいあそんだり、おんせんに入ったりしたいとおもいます。

わたしは、小学校に入るときに中のしまにきました。はじめてみななどについたとき、たくさんの人がむかえてくれてびっくりしました。最初はドキドキしましたが、だんだんともだちができてあそべるようになりました。小学校に入学してせんがきがむずかしかったけれど、れんしゅうをしたらかんたんになりました。いまではかん字がかけるようになりました。とびばこも4だんとべるようになりました。学校はとてもたのしいです。中のしまはやさしい人がたくさんいるのでいいところだとも思います。わたしは中のしまが大すきです。なつになったら、またうみでいっぱいあそんだり、おんせんに入ったりしたいとおもいます。

【子どもたちの作品】①

「自分との戦い」

宝島中学校小宝島分校1年 森 文音
(平成27年1月16日南日本新聞ひろば欄掲載)

「歩いてもいいかな。」弱い自分との戦いの持久走大会

は、長距離が苦手な私にとって一番嫌いな行事だ。私が走るのには小宝島一周と湯泊というコースを合わせた3キロだ。練習を始めたばかりの頃は、島を一周するだけでへとへとになった。「少しくらい手を抜いてもいいかな。」何度も何度も弱い自分に負けそうになったが、そこで踏ん張って頑張ると、どんどんタイムが縮まっていた。ペース配分を考え、体が左右にゆれないように工夫した。

大会当日。少し雨がバラついてはいたが、風もなくいい条件で臨んだ。「自己新記録をだし、20分を切るぞ。」自分のペースで無駄な動きがないようにした。半分を過ぎると、足が重たくなり、呼吸が乱れてきた、少しペースを落とし、楽をしようとした。しかし、沿道で応援している島の方々や友だちの声に励まされ、弱い気持ちをぐっとこらえた。あと少し、あと少しと自分に言い聞かせ、精いっぱい走り切った。結果発表。自己新記録の20分30秒だった。20分を切ることはできなかったが、すがすがしい気持ちになった。

今回の持久走大会で長距離に自信がついた。苦手なことでも一生懸命取り組み、それが結果として残るようにしたい。

国民文化祭作文コンクールで二人入賞！(1,631点中18点が入賞)

口之島小学校6年 永吉 美悠
優秀賞 「鹿児島の人々の知恵と心」

「お前たちは、大切なことを忘れてる。それは、島の人々の知恵と心じゃ。」今年の口之島の文化祭の劇中のセリフだ。口之島の魅力が、山か、海かでけんかをしてるところに知恵の神が現れ、語り始めるこのセリフ。それでは、島の人々の知恵と心とは、何なのだろうか。この知恵の神のセリフの後には、こんなやりとりが続く。「島の人たちは、島の自然を守ってきた。そして、いつも島の外から来る者たちを温かく迎えてきた。今はやりの言葉で言うとおも・も・て・な・しですね。」そう、島の人々の知恵と心は、おもてなしにつながるのだ。これ、大人にも子どもにもできることだ。私自身、3年前に口之島に引越してきたとき、島の人から温かいおもてなしを受けた。引越した次の日には、児童生徒みんなと散歩した。一週間後には、学校で伝統的に踊っているエイサーをみせてもらった。その後も、毎日のように、口之島の自まんをしてもらった。島民の方たちは私たち家族に、とても優しくしてくれた。「魚が釣れたからあげる、さしみでするとおいしいよ。」とか、「野菜がいっぱいとれたけど、いる。」とか言われて、魚や野菜をもらうことはしょっちゅうだ。さらには、料理を教えてくれることも少なくない。私が受けたような島の方のおもてなしは、きっと、県内どこでもできる。その土地のおすすめの場所、観光名所等の案内、歴史の説明、おはら祭りや妙円寺詣りなど祭りの案内、特産物の紹介。きっと喜んでくれるだろう。小学生のような小さな子どもから、おじいちゃ



ん、おばあちゃんまで楽しめるように、一人ひとりの工夫も大切だ。どこでもできるが、簡単にできると言えるだろうか。おもてなしをするためには、自分で地元のことを知る事が第一条件となる。何も知らない、もしくは、詳しくは知らない、そんな状態でのおもてなしでは、おもてなしを受けている方も、全然満足しない。「よく知り、自分も体験した上で、おもてなし。」それが私の得たおもてなしの極意だ。

鹿兒島の魅力は山だけでなく海だけでもない。火山とともに生きてきた、台風と戦い生きてきた、力強い県民と一人ひとりの知恵と、来る人を温かく迎える思いやりの心も絶対に知ってもらいたい。

鹿兒島に来た人に、言われた言葉がある。「鹿兒島に来て良かった。」「また、来たい。」「鹿兒島大好き。」「鹿兒島の人はいいい人だ。」

十島村の小・中学校からのメッセージ ...③⑤

宝島中学校教諭 三宅 達郎

「おはようございます。」「お疲れ様です。」宝島の一日は気持ちの良いあいさつから始まる。教員になって、朝からこんなに地域の方々といさつをしていただろうか。たくさんの教科を指導しなければならなくなったが、島に保体(相撲やウインドサーフィンなど)、美術(夜光貝や和紙、陶芸など)や社会(民謡や芭蕉布、歴史など)たくさんの先生がいる。これらの先生方の力を借りて、子どもたちと一緒に自分も成長できるように感じる。ちなみに、昨年末はしめ縄づくりに四苦八苦し、3人の高齢者の皆様から指導をいただいたが、ついに完成できず…。来年こそはりっぱなしめ縄を作りたい。もし、宝島に来ていなければ、きっといろいろなことに触れる機会を逃し、教科指導と部活動等の指導に明け暮れていたことであろう。十島村に来て、少しずつチャレンジ精神を忘れつつあったことに気づかされた。

私は、十島村に来て、「学校が地域にとって、とても大切な存在なのだ。」と本当に理解できた。学校と地域が一体になって子どもたちを支えている、そして私自身も支えられている。おかげで、私も研究課題である身近な地域を教材化することに正面から向き合っている。嬉しいことだ。そして、子どもたちの素直さには驚かされる。指導や助言を素直に聞き、ぐんぐん伸びていく。その姿を見ていると、「自分の子どもの頃こうだったら、今と少しは違っていたのかな。」とつくづく感じる。日々子どもの力はすごいと実感させられる。自分の子どもができたなら、宝島小・中学校に通わせたいと思う。その前に結婚をしないといけなけれども…(笑)。赴任して刺激なことばかりだが、十島村の経験を教員生活に十分に生かしていこうと思う。だから、ここでもっと*願晴ろう。(努力が報われ、自分もみんなも顔が晴々なるという意味。)

教職員仲間である「あなた」への私からのメッセージ

十島村は「島民の方々の温かさ」や「豊かな自然」「素直な子どもたち」「歴史や文化」など数えきれない魅力が満載です。そして、自分に挑戦できる素敵な場所です。